

日本文学研究における無常観について

関口忠男

はじめに

わが国に仏教が伝来して以来、仏教の根本思想の一つである無常思想が、時代を通して、わが国の人びとに受容され、また消化され続け、日本人の思想形成にも深くかかわってきたことは、一般に言われているとおりである。そのことは、日本文学の諸作品の成立・展開等を考える場合にも、無常思想の与えた影響の解明ということが、看過し得ない重要な課題となって現前するところとなっている。日本文学の発想・思考様式・叙述方法など、つまり作品の思想と表現の両側面にわたって、仏教思想が広く深い影響を与えてきているわけであり、その影響の解明ということは、日本文学研究においても重要な意味を持つものである。

ところで、本稿では、従来、日本文学と無常思想との関連の解明という課題の中で、文学研究という立場から最も中心

的な問題となってきたところの、日本文学と無常観との関連の解明という課題に焦点をしばり、この課題に対する基本的な問題点について考えてみたいと思う。

一

日本文学研究における無常観の問題については、従来、多くの研究が行なわれてきているが、ここで、その主要なものについて概観しておきたい。

まず、日本文学における無常観の展開を通史的・系統的に論じたものとしては、小林智昭氏『無常感の文学』（昭和三四年 弘文堂）、井手恒雄氏『日本文芸史に於ける無常観の克服』（昭和三四年 世界書院）、本田義憲氏『日本人の無常観』（昭和四三年 日本放送出版協会）、西田正好氏『無常観の系譜―日本仏教文芸思想史 古代・中世編』（昭和四五年 桜楓社）、『無常観の伝承―日本仏教文芸思想史 近世・

近代編』(昭和五一年 桜楓社)などの論著が数えられる。また、評論の世界でも、つとに小林秀雄氏『無常といふ事』(昭和二年 創元社)が話題を呼び、亀井勝一郎氏『愛の無常について』(昭和二四年 講談社)、唐木順三氏『無常』(昭和四〇年 筑摩書房)などで、無常観が論じられている。以上のほか、この問題に関連する論文は枚挙にいとまないほどである。

さて、以上の諸論考において、無常観に対するさまざまな考え方が示されているのであるが、現在、日本文学における無常観の問題を考えるにあたって、特に注目されるものについてみると、以下のようなになる。まず、『徒然草』研究から発した西尾実氏の見解である。西尾氏は、『徒然草』の「第三十段あたりまでの無常観は、世の中が無常であること

を悲しんでいる感傷的な生活感情としての無常観であり、詠嘆的な無常観である」が、「第三十一段以降になると、この詠嘆のもやが消えて」、無常は認識と自覚との問題になっているとして、『徒然草』の無常観に「詠嘆的無常観から自覚的無常観へ」の推移が見られることを指摘された^①。そして、ここに用いられた、無常観に詠嘆的無常観と自覚的無常観との二類をみるという概念と用語とが、広く受容されることとなり、他の作品の無常観を検討する場合にも多く適用され、一般に通用するところとなっている。この西尾説とともに、小林智昭氏の「無常感」説も広くゆきわたっている。小林氏

は、前掲の『無常感の文学』において、日本文学にみられる無常の認識について、「それは一つのれっきとした世界観と

いうには余りにも情緒的であり、詠嘆的傾向が強い」として、その認識は無常観には至ってなく、無常感と称するのが妥当であるとして、従来の「無常観」なる用語に対して、新しく「無常感」なる用語の使用を提唱された。また、井手恒雄氏も前掲書において、小林氏とは別に「無常感」なる用語を妥当とされている。本田義憲氏は、前掲書において、古代から現代にわたる日本人の、「無常」という情感の変遷の跡を仏教的無常観との合流ないし統一という観点から追求された。西田正好氏は、前掲二書において、日本文学における無常観の展開について、古代・中世では「形成」「確立」「展開」「普及」「徹底」「達成」「変容」、近世・近代では「復興」「伸展」「継承」「残存」「転成」「新生」「中興」「衰微」という変遷として論究されている。そして、亀井勝一郎氏は前掲書において、日本文学の無常観の特徴を考慮して「無常美観」なる用語を用いているが、これも注意される。また、山田昭全氏は、無常撰取の二類型をみる。即ち、「無常という命題を体験に立脚して受動的に感知するタイプと経験を超越し、能動的に撰取するタイプ」^②に分けられている。さらに、今成元昭氏は、『方丈記』と『平家物語』の無常観について、前者は「場の存在の上でのみ」、後者は「時の流動の中に」、それぞれ無常をとらえているとされ、「無常」に「空間の無常」

と「時間の無常」という視点を導入されたが、これは注目すべき見解の提示であると思われる。

以上のような無常観に関する諸説に対して、私説では、「無常」の本質を考えるとところから、原理的にみて、無常観を本来的無常観・生成的無常観・消滅的無常観の第一類・第二類に分類・規定するという案⁴⁾を提起したわけである。

二

日本文学における無常観を考える場合、まず、その前提となるのが、「無常観」の意味規定ということになる。ところで、従来、この「無常観」そのものについての厳格な意味規定は、意外なほど行なわれていないようである。言うまでもなく、無常観は、仏教思想としての無常思想に依拠して成立したものであり、この世の万物万象はことごとく生滅遷流して瞬時もとどまることなく変化・変遷するものであるという、即ち万物流転を説くところの無常思想に基づき、この思想を原理として諸事象の変化・変遷の様相を批評的にとらえる見方を無常観と称すると考える。つまり、「無常」の原理が諸事象に対する批評基準となり、この基準から諸事象の变化・変遷に対して生ずる見方が無常観ということになる。これが、日本文学研究における無常観の問題の出発点となるわけであるが、この出発点については、諸家において特に異論はないといえよう。

なお、日本文学研究における「無常観」という場合、この「無常観」は、仏法修行上の観法の一種としてのものではない。例えば、日想観・月輪観・水想観、阿字観・九相観などというようなものではない。文学作品の作者の、叙述対象にみられる変化・変遷の様相を、無常思想を原理とし、それを基準として批評的にとらえる見方のことを指して無常観と言うわけであり、この点、注意しておきたい。

さて、上述の諸説の中で、現在の日本文学研究の世界において、一般的に通用しているのは、先にも触れたように、西尾実氏所説による、無常観を詠嘆的無常観と自覚的無常観との二類に分けるとらえ方であり、また、小林智昭氏所説による、日本文学における「無常」の認識の実態からみて、「無常感」の用語を用いるべきであるというところも有力に受容されている、とみられる。

ここで問題にしたいのは、無常観という場合、「無常」ということの本質を検討した上で、その名称が考慮されているかということである。一般に通用している詠嘆的無常観や自覚的無常観という名称にしても、詠嘆的無常観は、無常の「滅び」に触発されて起こる人間感情としての詠嘆性に着目して名づけられたものであり、自覚的無常観は、無常の理念を自覚し、そこに立脚して、人間感情としての詠嘆性を克服した段階のものを指しており、いずれも「無常」の事象に対する認識主体としての人間の心的状態に対して名づけられた

ものである。これらは、「無常」という原理に対して、そこから触発される人間の心的状態という、いわば原理を本にすれば、その原理から誘発されるものの属性ともいべきものに對して名づけていることになる。小林氏の「無常感」説も「無常」に触発される人間の心的状態に着目したところからの名称であり、これも「無常」の原理に對してではなく、その属性に對して名づけたものといえよう。詠嘆的無常觀や自覺的無常觀、さらには無常感という名称は、人間の美的感動の表現を研究対象の主体とする文学の研究においては、適格性が高く、極めて有効なものと判断されるが、これらの名称が「無常」の属性に對する名称である以上、ここで、「無常」の本質を考察した上での名称が考えられてもよいのではないかと思考する。このことについては、私説はすでに公表しているところであるが、ここでは説明等において十分な点が多かった。そこで、ここに改めて稿を起し、私説の再説・補足をおきたい。論述上、旧稿と表現の上において重複する箇所も生じるところとなったが、この点は予めご了解を得たいと思う。

三

さて、無常觀について、その本質を考えるに当たっては、仏教經典にみる「無常」の用例を検討するのが、最も妥当であると思われる。仏教經典における「無常」の用例は数多く

みられるが、その中で、『大般涅槃經』聖行品所説の諸行無常偈が、最も有名であり、その影響も大きく、かつ、仏教教義の中の「無常」の意味づけが極めて明確に説示されていると考えられる。そこで、この諸行無常偈をもとに「無常」について考えてみたい。『大般涅槃經』聖行品の諸行無常偈は、以下の四句より成る。

諸行無常

是生滅法

生滅滅已

寂滅為樂

第一句「諸行無常」は、「諸行」即ち万物は、「無常」即ち、生滅してとどまることなく変化・変遷するものであると説く。これは、われわれの覚知する現象界の全ての物が、瞬時もとどまることなく変化・変遷しているという認識であり、ここに万物流転という無常思想の根本義が示されるとともに、仏教における現実認識の基本が提示される。第二句「是生滅法」では、「是」即ち、前句における「無常」は、「生と滅との法なり」と説く。これによれば、「無常」は、「生」の法と「滅」の法という二つの方向の「法」（原理・原則）に分かれることになる。これを図解すれば、つぎのようになろう。

無常
┌ 生ノ法
└ 滅ノ法

ここでは、「無常」ということの内実が、「生」ノ法、即ち、

生成的方向の変化としての原則と、「滅」ノ法、即ち、消滅的方向の変化としての原則とに二分される。「無常」即ち変化・変遷するということの実態は、複雑多岐にわたる多様な様相を示すものであるが、それらをすべて分類・整理すれば、「生」と「滅」とのいずれかの方向の変化に帰結されるわけで、この第二句において、「無常」に「生」と「滅」との両側面の変化のあることを「法」（原理・原則）として説いていることは、「無常」の本質を考える上で、極めて重要なことであると考えられる。つまり、諸行無常偈によれば、「無常」の対象は「諸行」（万物）であり（第一句）、その「無常」の本質は、「生」の方向性をもつ変化と「滅」の方向性をもつ変化とに二分される（第二句）ということである。ここに示された「無常」の本質論は、文学における無常観を考える場合にも当然適用され得るものと考えられるが、これについては、後述する。

第三句「生滅滅已」では、「無常」の内実である「生」と「滅」という対極的なものの対立から生ずる現世の苦を「滅し已る」、即ち超克・超越することを説き、第四句「寂滅為楽」は、そのようにして苦を滅した世界である「寂滅」の境地、即ち、悟りを得た境地は、もはや苦はまったく無く、楽そのものである、と説いている。

このように諸行無常偈は、最初に仏教の大前提である無常の原理を掲げ、ついで、その無常の内実として「生」と「滅」

との対極的な両側面を説き、さらに「生」と「滅」との対立から生ずる現世の苦の超克を説き、最終的に苦を滅した悟りの境地の達成に至るといふ、仏教のありかたをみごとに表現したものとなっている。

四

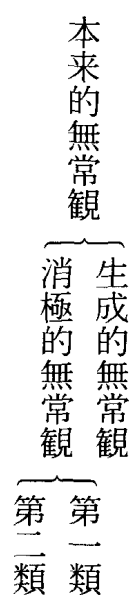
諸行無常偈を考察したところで、無常観を考える場合に注目されるのが、すでに触れたように第二句である。ここでは、「無常」の内実として、「生」の方向の側面と「滅」の方向の側面をみるといふ「無常」のとらえ方が示されているわけである。「無常」に対するこのようなとらえ方は、諸行無常偈のほかにも、例えば『大智度論』卷第二十三に「一切有為法、無常者。新、新、生、滅、故、属、二、因、縁、一、故、不、二、増、積、一、故」（付点筆者、以下同じ）とある。ここでも、「無常」を「新新生滅」するものとしてとらえていて、「生」と「滅」との両側面から「無常」がとらえられている。これらから、「無常」を「生」と「滅」との両側面からみるといふことは、仏教における「無常」のとらえ方の基本であったと考えられよう。

このように考えると、無常思想に依拠するところの無常観にも、以上のような「無常」のあり方は通用すべきものと考えられるわけで、無常観にも「生」の側面と「滅」の側面とのそれぞれに無常観が考慮される必要があるように思われる。即ち、「無常」のうちで、「生」の方向の変化ということは、

事象の生成発展してゆく上昇的な側面の変化を「無常」として認識することで、この側面の変化を「無常」としてとらえ、それを批評基準として観ずるところからは「生成的無常観」、「無常」のうちで、「滅」の方向の変化ということは、事象の消滅衰退していく下降的な側面の変化を「無常」として認識することで、この側面の変化を「無常」としてとらえ、それを批評基準として事象の変化を観ずるところからは「消滅的無常観」というように呼称さるべき無常観が成立し得ると考えられよう。さらに、「無常」そのものは、本来的には「生」「滅」の両側面を包摂しているわけであり、ここからは「生」「滅」の両側面を包摂したところの無常観が考えられ、これを「本来的無常観」と呼ぶことができよう。このようにして、「無常」ということの本質にそって原理的にみた場合、無常観を本来的無常観・生成的無常観・消滅的無常観というように分類・規定することができるように思われる。そして、これらのうちで消滅的無常観は、「無常」の認識の程度によって、二類に分かれる。消滅的無常観は、事象の消滅・衰退の相に属目して、それを「無常」と観ずるものであるゆえに、認識主体の感情として、消滅・衰退という現象に触れて自然と催される悲哀感・哀傷感などの詠嘆的感情が随伴し易い。このように、まず「滅び」としての「無常」を情調的に受け止める段階が考えられる。しかるに、「無常」の認識のさらなる深化・徹底によって、消滅的無常観でありながら、「滅

び」は「無常」という普遍の原理の当然の実現であることを覚知し、「滅び」を情調的に受け止める段階を超え、詠嘆的感情を克服・超克し得ている段階のものも考えられる。このように消滅的無常観は、その詠嘆性克服の可否によって二類に分けられる。つまり、消滅的無常観で、情調的世界に没入し、「滅び」からくる詠嘆性を克服・超克し得ていない段階のものを第一類、情調的世界から脱出し、「滅び」からくる詠嘆性を克服・超克している段階のものを第二類と名づけることができよう。

ここで、以上、無常観について考察してきたところを図示すれば、つぎのようになる。



五

無常観を以上のように分類・規定したところで、これらの無常観をもって、日本文学の諸作品を見わたした場合、そこに見られる無常観は、その多くが消滅的無常観に属し、しかも「滅び」からくる詠嘆的情調に没入している段階である、その第一類に相当する場合が顕著にみられることが指摘される。このことは、日本文学における無常観という場合、事象の消滅的变化に「無常」を感受し、観取することが圧倒的に

多いことを示しているとともに、日本文学の一つの大きな特徴ともなっていると考えられる。

しかるに、「無常」を本質論的に、また原理的にみた場合、無常観として、消滅的無常観のほかに生成的無常観ないしは本来的無常観が成立し得るわけであり、日本文学の無常観を考察するに当たっても、生成的無常観や本来的無常観からの視点をも考慮してゆく必要があるのではないかと思われる。

ところで、日本文学研究の上で、無常観の用語として最も広く通用しているのは、上述のように西尾実氏所説によるところの「詠嘆的無常観」と「自覚的無常観」、そして、小林智昭氏所説の「無常感」であるとみられるが、これらを私説に対応させてみると、「詠嘆的無常観」は消滅的無常観の第一類に相当し、「自覚的無常観」は消滅的無常観の第二類にほぼ相当すると考えられ、また、「無常感」なる用語は、日本文学上の無常観は、私説によるところの消滅的無常観の第一類の範疇を出るものではないという見地からの命名である、ということになると思われる。

六

無常思想の本質的・原理的な考察によって導き出された、上来の無常観の分類・規定は、果たして日本文学の諸作品にみる無常観の考察に当たって、どのような意味を持つことになるのであろうか。このことについて、少しく考えてみたい。

まず、現在の日本文学研究における無常観の研究において一般的に用いられている「詠嘆的無常観」や「自覚的無常観」、さらには「無常感」などは、いずれも私説による無常観の分類の中の消滅的無常観に属するところの用語であることが注目される。つまり、現在までの日本文学研究における無常観の研究においては、「無常」は消滅・衰退の変化とのみとらえて、「無常」のもう一つの側面である生成・発展の変化については、これを「無常」の認識から除外してきたということが指摘できよう。このことは、日本文学の諸作品にみられる無常のとらえ方には、生成発展の変化を「無常」としてとらえる実例が見出し難く、本来的無常観も成立し難いという実態からみて、止むを得ざることであったと思われる。

このようにして、日本文学の諸作品にみられる無常観としては、消滅的無常観であり、その第一類か第二類に属する、と言い得るようであるが、その具体的な表出様相の個々に関し、例えば『方丈記』『平家物語』『徒然草』については、すでに検討したところである。そこでいま、生成的無常観ないし本来的無常観は、日本文学の諸作品において、まったく、その成立の可能性もないものであろうか、一考してみたい。

まず、生成的無常観の問題を検討するに当たって、『徒然草』第一五五段のつぎの表現に注目したい。

春暮れてのち、夏になり、夏はて、秋のくるにはあらず。春はやがて夏の気をもよほし、夏より既に秋はか

よひ、秋は則ち寒くなり、十月は小春の天気、草も青くなり、梅もつぼみぬ。木の葉のおつるも、まづ落ちてめぐむにはあらず。下よりきざしつはるに堪へずして落つるなり。

ここでは、まず自然の四季の推移について、春が暮れて、その後に夏になり、夏の果てた後に秋が来るという、常識的なとらえ方を否定し、春はその深まりのうちに早くも夏の気をもよおし、夏のうちからすでに秋の気は通い、秋は秋であるままにいつしか寒くなる、というように、季節の推移がもたらされる要因に視点を定め、そこにみられる変化の相の実態をみごとに把握するところとなっている。四季の推移の因つて来たところを「無常」の理の本質論的な立場からとらえているといえよう。このようにして、四季の推移という変化の相が、ダイナミックな動態としてとらえられているわけである。そして、このような無常の実相の追求の上に、「木の葉のおつるも、まづ落ちてめぐむにはあらず。下よりきざしつはるに堪へずして落つるなり」と述べる。ここで、「木の葉のおつる」という現象を、葉が枯れ落ちて、その後に新芽が生ずるといふのではなく、「下よりきざしつはるに堪へずして落つるなり」ととらえたところには、落葉という消滅現象の因つて来るところを、枝の内部に蓄積・充滿され、そこではもはや堪えきれなくなった新芽の生命力にみる、即ち、新芽生成の力の圧力という生成現象にみる、というとらえ方

が示される。つまり、ここでは消滅という変化の現象が、生成という変化の現象によってとらえ直されていることになる。「無常」ということのなかの「消滅」の側面を、もう一方の「生成」の側面からとらえ直しているわけであるが、このことは、「無常」の理に対する徹底的な理性的認識の深化と「無常」の本質に立脚する視点の確立とによってもたらされたものであると考えられる。

日本文学における無常観は、従来、「消滅」はあくまでも「消滅」であり、その観点からのみ論じられてきた経緯があるが、ここにいたって、「消滅」という現象を「生成」という側面からとらえるという観点が示されたことは、「無常」という変化の理の実態というものが、生成と消滅との、いわば弁証法的な関係による展開としてとらえられているとみられるわけである。このことを無常観の分類の上で言えば、落葉という消滅の変化の現象をみるところに成立する消滅的無常観に対して、落葉という消滅の変化の現象を新芽生成の生命力の充滿という生成の変化の現象としてとらえ直すという視点がはたらいっているわけで、この点に関しては、ここに生成的無常観としての観点が成立している、ということができよう。つまり、本来、消滅的無常観として自足すべきであった無常観に対して、生成的無常観からの観点をもってとらえ直しているわけである。このことは、日本文学における無常観の理解・把握の上での画期的な出来事でもあったとみられ

る。しかし、ここにみられる無常観は、生成的無常観そのものではない。落葉という消滅現象のとらえ方をめぐる問題が基本にあり、この基本から成立する消滅的無常観が依然として基軸となっており、その消滅的無常観に対して、生成的無常観からの観点をもってとらえ直しているわけである。これは、消滅的無常観に対する一つの解釈として生成的無常観からの観点に基づく見方をもって当てたという関係であり、生成的無常観そのものが独立した無常観として成立しているわけではない。ここは注意すべき点であると思うが、とにかく、この『徒然草』第一五五段において、消滅的無常観の展開と関連して、その無常観の世界において、生成的無常観成立への契機が獲得されている、とみることができよう。そして、このことが、この第一五五段にみる無常観が、『徒然草』の無常観として最高の達成を示すのみならず、日本文学における無常観の中でも画期的な展開を遂げたものとされる無常観と成り得た大きな因由となっているように思われる。このように、日本文学における無常観を考える場合において、生成的無常観からの視点ということは、看過し難いように思われる。

つぎに本来的無常観について考察してみよう。まず、『方丈記』序章の冒頭部に注目しよう。

ユク河ノナガレハタエズシテ、シカモ、トノ水ニアラズ。ヨドミニウカブウタカタハ、カツキエ、カツムスビ

テ、ヒサシクトゞマリタルタメシナシ。世中ニアル人ト
栖ト、又カクノゴトシ。^⑩

ここにみられる有名な流水の比喩には、結局は、第一文前半部において「常住」の相が、後半部において「無常」の相が、接続詞「シカモ」によって接続されるかたちで説かれていて、一見常住の相を呈するものも、その実相は無常であるという、「無常」の理を提示したものとみられるのであるが、第二文では、淀に浮かぶ水泡の状態が、「カツキエ、カツムスビテ」として、「消」と「結」、即ち「滅」と「生」との両側面にわたる変化の相を示すものとしてとらえられる。つまり、ここでは、淀に浮かぶ水泡の「生」「滅」という変化の現象に託して、「無常」ということが、「生」と「滅」との両側面にわたる変化の理法としてとらえられているわけである。となると、ここにみられる無常観は、「生」「滅」両側面の変化にわたるところの本来的無常観の様相を呈するものとして打ち出されていることになる。そして、その様相が「ヒサシクトゞマリタルタメシナシ」として、水泡の「生」「滅」という変化が久しく停止した「タメシ」（前例）はかつて一度もないということからして、「生」「滅」にわたる水泡の変化、即ち「無常」は、現世の理法であるという認識が示されている、とみられる。このようにして、ここでは、まず、本来的無常観というべきものが、かなりはっきり提示されているとみることができよう。ところで、ここに示された本来的無常

観は、すでに「カツキエ、カツムスビテ」という「消」(「滅」)を「結」(「生」)に先行させる表現形式を有しており、生成性に対して消滅性を強調しようとする特徴を有する。続いて『方丈記』の序章は、第三文にいたって、流水の比喻の本義が、現世における「人」と「栖」との無常を説くことであるとして明示される。つぎに序章は、冒頭部に提示された無常の理法を実証するものとして、都の中の「人」と「栖」の無常なる実状を述べるが、この文章は、全面的に冒頭部の文章と対応関係にあり、冒頭部に提示された、生成面と消滅面という無常の両側面をとらえて本来の無常観の様相を呈するところの無常観が、都の中の「栖」と「人」のそれぞれについて、具体的に細叙されるかたちで再説される。ところが、ここでは、「或ハ大家ホロビテ小家トナル」とか、「朝ニ死ニ、夕ニ生ル、ナラヒ」など、生成性に対して消滅性に傾斜する特徴が、より明確になる。そして、最後に序章は朝顔の比喻によって終結されるが、ここでは、「人」と「栖」とが、朝顔の「花」におかれた「露」と、その「花」とに喩えられ、「或ハ露ヲチテ花ノコレリ。ノコルトイヘドモ、アサ日ニカレヌ。或ハ、花シボミテ露ナヲキエズ。キエズトイヘドモ、夕ヲマツ事ナシ」と結ばれる。即ち、朝顔の「花」も、その「花」におかれた「露」も、いずれもその究極は消滅するものとして把握され、それまで僅かながらも保持されてきた生成面に対する視点は完全に払拭され、消滅面のみを視点を注

ぐ無常観と成り了えている。つまり、序章における無常観は、「生成」「消滅」の両側面にわたるところの本来の無常観として提示されたものの、その無常観は、その当初から生成性に対して消滅性に傾斜するという特徴を有し、その「無常」の実証的叙述の展開を経て、究極は生成的側面への視点をまったく払拭した、消滅的無常観に成り了っている、ということになる。そして、こういう消滅的無常観が、現世における「人」と「栖」の無常からいかに解脱し得るかという『方丈記』の主題を主導的に形成するところの世界観となつて、作品に機能していくわけである。

このようにして、『方丈記』の世界観としての無常観は、いわゆる消滅的無常観に帰結されるわけであるが、当初、「生成」「消滅」という「無常」の両側面にわたる視野をもつたところの本来の無常観の様相をもつて、その無常観が提示されたということは、簡単に看過すべきことではないであろう。ここには、文学における本来の無常観の成立の契機が示されているわけであり、この契機の示されたことの意味については、文学研究の立場からも十分に考慮する必要があると思われる。

つぎに、本来の無常観について『徒然草』の場合を考えてみよう。『徒然草』の無常観が消滅的無常観の第一類から第二類への展開を示し、しかも、その展開過程には四段階があるということについては、すでに論じたところであるが、

『徒然草』においては、本来的無常観からの視点は指摘できないのであろうか。

『徒然草』第二十五段は、前後二段落に分けられるが、前段落で無常消滅の理を説き、後段落でその無常の実例を挙げ、これを悲嘆するという構造を示す。前段落は、まず、「飛鳥川の淵瀬常ならぬ世にしあれば、時うつり、事さり、たのしび・かなしびゆきかひて」と書き出される。ここでは、「常ならぬ世」、即ち、無常なる現世のとらえ方において、時世の経過の中で、「たのしび」「かなしび」という相対的な感情状態の交互併存としてとらえられる。本来的無常観が、「生成」と「消滅」との両側面を視界に収める無常観であるという観点からみると、「たのしび」は「生成」に、「かなしび」は「消滅」にそれぞれ随伴するところの感情であることと考えると、ここには本来的無常観に通う無常観が示されているとみることができようか。しかるに、これに続く「はなやかなりしあたりも人すまぬのらとなり、かはらぬすみかは人あらたまりぬ」にいたると、前半部では「はなやか」から「人すまぬ」へという、消滅の方向への変化としてのみ描かれ、後半部の「人あらたまりぬ」は、必ずしもその変化の方向は明示していないものの、消滅の方向としての表現であるとみられ、ここにおいて消滅面への傾斜が顕著になる。そして、「桃李ものいはねば、誰とともにかむかしを語らん。まして、見ぬいにしへのやんごとなかりけん跡のみぞ、いとほ

かなき」という前段落の結文において、変化を生成面からとらえる視点は完全に払拭され、変化を消滅の側面のみでとらえ、そのような変化の顕著な具体例を念頭におき、それを「いとほかなき」と悲嘆するにいたる。つまり、ここにもみられる無常観は、本来的無常観に通うものとして提示されながら、やがて生成面への視点を払拭し、消滅面のみを視点を注ぐところの消滅的無常観と成り了っており、しかも、その無常観は、消滅を悲嘆するところのものであるので、消滅的無常観の第一類の無常観であるということになる。そして、ここにもみられる消滅的無常観の成立の様相は、『方丈記』序章にみる無常観の場合と類似しており、注目されるところである。

また、『徒然草』の美意識は、第一九段と第一三七段に集約的に表出されていると考えられるが、この両段について、本来的無常観の視点から考えてみよう。第一九段は、冒頭に「折ふしのうつりかはるこそ、ものごとにあはれなれ」という主題を提示し、続いて、これを証するものとして、「折ふし」即ち四季の移り変わりにみる、自然と人事にわたる一つの事物の上に見出される情趣の具体例を書きつづる。ここでは、四季の「うつりかはる」という推移の中に情趣を見出して、四季の推移という動的状态の中に美を認識するという、いわば動的な美の把握という美意識が展開されている。これは、一般的な美意識である、美を静止した状態にお

いて把握する、いわば静的な美意識に対して、『徒然草』の美意識の一つの大きな特徴とされているわけであるが、『徒然草』に、このような動的な美意識が成立し得たのには、その根底に無常観の認識の問題があるのではなからうか。冒頭に「折ふしのう、つりかはる」とした四季の変化というものは、生成とか消滅とかのいずれか一方に限定したのではなく、当然、その両側面を含み込んだ変化とみるべきであろう。このように見ると、ここで「折ふしのう、つりかはる」というように四季の推移をとらえていることには、変化における両側面、即ち、生成面と消滅面との両側面にわたるところの本来的無常観に支えられた視点というものが設定されているようにも考えることができよう。

この第十九段の四季の情趣のとらえ方において、従来の静的な美意識のとらえ方を超えて、四季の「うつりかはる」という推移の中にこそ情趣を見出し、動的な美意識を成立せしめたということには、生成と消滅とを相互に見渡し得るといふ、変化に対する全的な視点を獲得したところの本来的無常観に支えられた客観的な審美眼を持ち得て、はじめて可能になったように考えられるわけである。

第一三七段では、「花はさかりに、月はくまなきをのみ見るものかは」に始まる、不完全美意識論とも称すべき美のとらえ方が主張される。ここでは、桜花の満開美や隈なき月の美に対する未開美・頽落美、雨空の月の美など、つまり、完

全美に対する不完全美が主張される。「無常」という変化の理からみれば、「完全」も流転変化の一時的な姿にすぎず、「完全」もたちまちにその「完全」を欠き、「不完全」になるわけである。このことを「無常」の本質からみれば、その「不完全」も「完全」と何等変わるのではなく、両者は全く等価でなければならぬ。ここに、「完全」のみに価値を認めてきた伝統的思考に対して、新たに「不完全」の価値を認め、これを主張しようとする思考が発生するわけであり、このような思考のもとに不完全美の価値を主張する『徒然草』の美意識が成立したと考えられる。そして、その原理は、「よろづの事も、始・終こそをかしけれ」という情趣論にまで展開している。ここでは、「始」「中」「終」という事象の変遷推移の過程の中で、その盛時にあたる「中」をあえてはずし、盛時の完全に対して、不完全な状態にある「始」と「終」とに特に情趣を認めるといふ思考の展開にまで至っているわけである。そして、これは、第八二段の「すべて何も皆、ことのと、のほりたるはあしき事なり。しのこしたるを、さてうち置きたるは、面白く、いきのぶるわざなり」とか、第八三段の「月満ちてはかけ、もの盛りにしては衰ふ。よろづの事、さきのつまりたるは、破れにちかき道なり」にみられるところの欠落価値観ともいふべき作者の価値観を背景にしたものと考えられる。ところで、ここにみられる無常観は、事象の変遷について、その消滅面に視点を注ぐところの消滅

的無常観という根本的性格を有し、かつ、「滅び」から随伴する詠嘆性を超克したところの第二類に属するものであるが、「無常」としての消滅の意義を特に重要視する展開となっていると考えられる。

このようにして、第一三七段は、消滅的無常観第二類が根底にあって、不完全美意識論ともいふべき『徒然草』の特徴的な美意識論が展開していると考えられるわけであるが、このような美意識論が形成されるためには、「消滅」の本質を追究するという思考の中で、当然、「消滅」を「生成」と対比して、その「消滅」の意義を究めるといふ過程があるわけであり、ここには、「無常」を「生成」と「消滅」との両側面にわたるものとしてとらえる、いわゆる本来的無常観としての視点の介在が契機となつて、その消滅面に集中してゆくという経緯があつたものと考えられる。第一三七段にみられる不完全美意識論の成立に際し、本来的無常観としての視点の媒介が、その重要な契機となつていたことが想定されるわけである。

おわりに

日本文学における無常観の問題を考えるに当たつて、まず、大前提となるべき「無常観」そのものの語義について考察を加え、仏教思想としての「無常」の本質・原理を考えるところから、無常観を本来的無常観・生成的無常観・消滅的無常

観の第一類・第二類というように分類・規定する試案を提示し、このように分類・規定した無常観が、実際に日本文学の作品にいかにかかわっているかについて、そのごく一部について考察を加えてみた。

従来、一般的に通用されてきた詠嘆的無常観・自覚的無常観ないしは無常感というような用語をもって、日本文学における無常観を考えることが、ほぼ定着している状況に対して、「無常」の本質・原理論より導き出した私説は、必ずしも有効ではないかもしれない。日本文学における無常観の大部分は、私説によるところの消滅的無常観に属し、しかも、その第一類に属するものが圧倒的に多く、第二類に属するものは比較的稀少であるという大きな傾向を指摘せざるを得ない。そして、生成的無常観や本来的無常観は、日本文学の中においては独立して成立しているとは言ひ難いようである。しかしながら、拙稿において少しく考察したように、その作品の無常観、さらにはその世界観を考えると、生成的無常観や本来的無常観からの視点というものが、その無常観の形成に重要な契機をなしている場合があり、このことが作品の世界観にも何らかの影響を与えていることが考えられるわけであり、こういう意味において、私説について、今後さらに考察を深めていきたいと考えている。

注

- (1) 日本古典文学大系『方丈記 徒然草』(昭和三十三年 岩波書店)の「解説」。
- (2) 「中世文学と『無常』」(講座 日本文学の争点) 3 中世編 昭和四四年)
- (3) 『仏教文学の世界』(昭和五三年 日本放送出版協会)
- (4) 「方丈記考(二)―その無常観の詠嘆性の問題について―」(『日本文学研究』第二二号 昭和五八年一月)、「方丈記」序章考―その無常観の検討―(『日本文学』第三七卷第三号 昭和六三年三月)、「中世文学序考」(平成四年 武蔵野書院)
- (5) 注(4)に同じ。
- (6) 『^{大正}新脩大藏経』第十二卷所収。
- (7) 『^{大正}新脩大藏経』第二十五卷所収。
- (8) 『方丈記』については、注(4)の論文、「平家物語」については、「平家物語」序章覚書―主としてその無常観をめぐって―(平成八年七月 今成元昭編『仏教文学の構想』(新典社))、「徒然草」については、「徒然草」の無常観」(『中世文学序考』(平成四年 武蔵野書院))において考察を加えた。
- (9) 永積安明編『校注 徒然草』(昭和四十七年 武蔵野書院)
- (10) 大福光寺本(武蔵野書院複製の影印本 昭和三四年)に拠る。
- (11) 『徒然草』の無常観」(『中世文学序考』 平成四年 武蔵野書院)